

気まぐれの人形師

小川未明

青空文庫

雪ゆきの降ふらない、暖あたたかな南みなみの方ほうの港みなまち町まちでありました。

ある日ひのこと、一人ひとりの娘むすめは、その町まちの中なかを、あちらこちらと歩あるいていました。しばらく避寒ひかんに、こちらへやつてきていたのですけれど、あまり日数ひかずもたちましたので、お父さんにつれられて、また北きたの方ほうの故郷こきょうへ帰かえろうとしました。その前日ぜんじつのこと、娘むすめは、つぎには、いつくるかわからない、このなつかしい町まちの有り様ありさまをよく見みておこうと、こうして歩あるいていたのであります。

町まちの郊外こうがいには、丘おかの上うえに、圃はたけの中なかに、オレンジが、美うつくしく、西日にしびに輝かがやいていました。青黒あおぐろい、厚あつみのある葉はの間あいだから、黄色きいろい宝石ほうせきで造つくられた珠たまのように見みられました。また、波なみの静しずかな港みなとの口くちには、いくつも船ふねが出でたり入はいったりしていました。遠くへいく汽船きせんは、おっとりとうるんだ、黄昏たそがれ方がたの空そらに、黒くろい一筋ひとすじの煙けむりを上げていました。そして、高いたかいほぼしらの頂いただきには、赤あかい旗はたが、ちようど真まつ赤かな花はなのように風かぜにゆらめいていました。娘むすめには、それらの景色けしきは、歩あるいているときは目めに入はいらなかつたのです。けれど、たびた

び見た景色でありまして、頭の中に残っていましたから、いつでも思い出しさえすれば、ありありと目の中に映ってきました。娘は、北の寒い国に帰ってからも思い出して、なつかしむにちがひありませんでした。

町の中を歩いている娘は、ただこのとき、汽笛の音を耳に聞いたばかりです。それは、港に停まっている汽船から吹いた笛の音であります。彼女は、この笛の音を聞くと、これから帰る故郷の景色を目に描きました。そして、考えました。

「まだ、私の国は寒いだろう。しかし、じきに春になる。そうすれば、花も咲くし、いろいろの鳥がやってくる！」

こう思いますと、やはり、胸の中の血潮は躍つたのであります。いろいろの鳥は、この町の空に、また林の中に鳴いていました。しかし、この小鳥も、いつかは、あの北の方の彼女の故郷の方へ飛んでゆく日があるのだと思うと、娘は、これらの小鳥を自分の家の裏にある林の中で、ふたたび見る日を楽しみとせずにはいられませんでした。

「私は、なにをお土産に買って帰つたらいいだろうか。」と、娘は、この町で製造されるいろいろな品物や、また、お菓子のようなものを買集めました。そして、また、いつまでも自分が記念にして、しまっておくようなものが、なにか見つからないものかと思

つて、町の両側をながめながら歩いていました。

すると狭い道の上へ、片側の小さな店先から、紫色の光線がもれてきて、あるところだけ紫色に土の上を彩っていました。娘は、その光線がどこからどういふふうにもれてくるのであろうかと、思わず、店の方へ寄って行って、色ガラスで張られた窓の内部をのぞいてみました。

不思議にも、その小さな店は、人形屋でありました。奥のたなの上に、いくつも同じような人形が並べてありました。そして、そのそばで、一人のおじいさんが、筆をとって、人形の顔を描いているのでありました。

おじいさんはランプの下で、人形の目や、鼻や、口を描いていました。そこで、いちいち筆を動かしては、大きな眼鏡をかけた目で、じつと人形の顔をながめています。自分の気になると、さもうれしそうに、それを丁寧に箱の中に納めました。そして、つぎの人形の顔を描きにかかったのです。もし、どこか自分の気にいらないうところがあると、おじいさんは、いつまでもいつまでも頭をかしげて、そのでき損なった人形顔をながめていましたが、しまいに前のよくできたときとは違って、手荒に一方の箱の中に入れてしまいました。

娘は、黙つて、それを見ていましたが、この人形こそ自分は買つて帰つて、長い間の忘れがたい記念にしようと思ひました。そこで、彼女は店先の戸を開けて、中に入りました。

「お人形を見せてくださいな。」と、娘はいいました。

脊を円くして、人形の顔を描いていたおじいさんは、このとき筆を下に置きました。そして立つてきて、娘の前へ、たなの上にあつた二つの箱を下ろして並べました。

「さあ、どちらになさいますか。」といつて、おじいさんは聞きました。

娘は、二つの箱の中から人形を手にとつて見くらべたのであります。一つの箱には、「しあわせ人形」と書いてありました。そして、もう一つの箱には、なんとも書いてありませんでした。

「こちらのほうは、すこし価が高うございます。こちらのほうは、すこし安うございます。」と、おじいさんはいつて、「しあわせ人形」と、書いてある箱の中に入つて人形は価が高いのだといひました。

娘は、そのどちらも手に取り上げて、よく見ましたけれども、すこしも顔や、形に、ちがいはありませんでした。

「どこが、ちがっているのですか？」と、彼女かのじよは、おじいさんにたずねました。

「この二つは、見たところでは、どこもちがいはありません。ただ、人形にんぎようの顔かおを描かいた時じぶん分の私わたしの気持きもちちです。『しあわせ人形にんぎよう』と書かいてある箱はこの中なかにはいつている人形にんぎは、その顔かおを描かくときに、私わたしの気持きもちちが晴はれ晴ばれとしていましたから、そう書かいたのです。そして、もう一方ほうの箱はこの中なかに入はいっている人形にんぎようの顔かおを描かいたときには、なんとなく私わたしの気持きもちちがもの足たらなさを覚おぼえていたから、字じの書かいてない箱はこの中なかに納おさめたのです。」と、おじいさんは答こたえました。

娘むすめは、みようなことをいうおじいさんも、あるものだと思います。

「そんなら、こちらのなにも書かいてない箱はこの中なかに入はいっているお人形にんぎようさんは、不ふしあわせな人形にんぎようなんですか。」と、彼女かのじよは、おじいさんに問といました。

おじいさんは、大きな眼鏡めがねの底そこから、落おちくぼんだ目めを輝かがかして、じつと娘むすめの顔かおを見みながら、「それは、人間にんげんの身みの上うえも、人形にんぎようの身みの上うえも同じことおなです。だれも行く末すえのことを知しるものがありません。ただ、私わたしが人形にんぎようの顔かおを描かくときに、一方ほうは気持きもちちよく、一方ほうは、なにか心こころの中なかにももの足たらなさを感かんじていたというまです。」と、おじいさんは答こたえました。

娘は、高いほうの人形と、安いほうの人形と、二つ買いました。そして、その店から出ました。空の色は、水色がかって、月がほんのりと夢のように浮かんで、港の屋根を照らしていたのです。

彼女は、二つの人形の幸福を祈りながら道を歩いて宿に帰りました。

二

翌日の晩には、もう、娘は、父といっしょに、汽車の中に腰をかけていました。そして、あの夢のように美しい港の町は、すでに遠く、あちらとなつてしまつたのです。二日の夜は、故郷の家に帰つてみんなと話をしていました。まだ、北の国には、雪が地のうへに積もっていました。

その晩は、若い叔母さんも、遊びにきておられて、家の中は明るくにぎやかでありました。娘は、二つの人形を叔母さんに見せました。

「こちらが、しあわせの人形よ、こちらは不しあわせの人形なのよ。だって、叔母さんは、この二つが同じには見えないこと？」と、娘はたずねました。

叔母さんは、二つの人形を手に取り上げて、

「まあ、かわいらしいお人形だこと、ほんとうにいいお人形さんなのね。二つ同じなんですよう。どうして、一つはしあわせの人形で、一つは不しあわせなの？」と、叔母さんは頭をかしげて聞かれました。

「だって、人形屋のおじいさんが、こちらは、しあわせで、こちらは、不しあわせだといつたのですもの。」

「そう、私が、着物を造つてきてあげましょうね。」と、叔母さんはいわれました。

二、三日たつと、叔母さんは、二つの人形に着物を造つて持つてこられました。一つのは、赤い色の勝つたちりめんで、一つのは紫色がかつたメリンスで縫われていました。

「ちりめんがこれだけしかなかったの。だから、しあわせのお人形さんに着せて、こちらのはメリンスにしておいたのよ。またこんど、いい布があつたときに、不しあわせのお人形さんに、着物を造つてあげましょうね。」と、叔母さんはいわれました。

二つ人形を並べておくと、赤いちりめんの着物を着たほうがお嬢さまに見えて、紫のメリンスの着物を着たほうがなんとなく、腰元のように見られたのでした。

また、しばらく日数がたつて、ある夜のことでありました。近所の知った家の小母さんが、子供を連れて遊びにこられました。帰る時分に子供は娘の人形をしつかりつかんでいて離しませんでした。

「これは、お姉ちゃんの大事な人形さんだから、坊が持つてゆくのでないの。」と、小母さんが、いくらいつても、子供は手から人形を離しませんでした。

「いいの、小母さん、貸してあげますから、持つていらっしやうていいの。」と、娘はいました。

「ほんとうに、すみませんね。あした、じきに持つてきますから、どうか貸してくださいね。」と、小母さんはいわれました。子供の持つていたのは、不しあわせのほうの人形でありました。子供をおぶつて、小母さんは娘や、彼女のお母さんたちにあいさつをして、家から出てゆきました。

外には、粉雪がさらさらと降っていました。小母さんは、もう自分の家へ着かれたろうと思われる時分でした。不意に戸口で、げたに着いている雪をたたいたものがありました。だれかと思うと、その小母さんがもどつてきました。

「まあ、途中で、この子供がお人形さんを落としたのですよ。いくら探しても見当

たらないので、ここまでもどつてきました。「といわれました。

「そんなら、私が探してきます。」と、娘は立ち上がりました。娘のお母さんは、ちようちんに火をつけてくださいました。そして、子供の小母さんと娘はいっしよに連れだつて、人形を探しに出かけました。

「ほんとうに、すみませんね。」と、小母さんは、娘にわびられました。

「いいえ、すぐに見つかつてよ。」と、娘は、笑いながらいつて下を向いて歩いてゆきました。

すると、だれも人の通らない、雪道の上に、不しあわせの人形は落ちていました。そして、もうその顔の上にも、体の上にも粉雪のかかっているのが、ちようちんの光に照らされて見られました。

「ああ、ここにありました。」といつて、娘は雪のかかった人形を拾いあげた。そして、心の中で、なんとという不しあわせの人形だろうと思ひました。

そこで、小母さんに別れて、彼女は、しっかりと人形を抱きながら家にもどつてきました。そればかりでなく、その年の夏には、不しあわせの人形は、たんすの上から落ちて、片手を折つてしまいました。

「どうして、このお人形さんばかり不しあわせなのでしょう？」と、彼女は怪しました。

いつしか、月日はたちました。いつか、南の方の港の町にいつてから三年めになりました。冬が、またやってきましたときに、

「ちやうど、子供の学校も休みだから、あの町へいつてこよう。」と、お父さんはいわれました。そして、いつしよにゆかれるということを知ったときに、彼女は、どんなに喜んでありますよう。

「ああ、またおじいさんのところへいつて、人形を買きましょう。」と、こう彼女は思いました。そして、もうけつして、不しあわせの人形は買うまいと思しました。南の国の町の有り様は、三年前とすこしも変わりはありませんでした。港の景色にも、丘のながめにも変わりはありませんでした。いろいろの小鳥は、林の中になんていませんし、オレンジの実は、やはり黄色に熟してました。

娘は、ある日、その町の中を歩いてました。いつかの人形屋にゆこうと思つてました。晩方の夢のようにかすんだ空の下を、紫色の光のさす店を探しながら見覚えのある路次に入つてゆきました。

「ああ、あの名人のおじいさんは亡くなりましたよ。気まぐれ者で、自分の造った人形にさえ、好ききらいをつけた人ですが……もうあの店はありません。いまでは、あの人の造ったものなら、どんな壊れた人形でも大騒ぎをして、旅の人などは集めてゆきます。」と、町の人は、娘がおじいさんの店を問うたときにいいました。

彼女 は、はじめて、あの人形が、そんなにいいのであるかということを知りました。娘はこのことをお父さんに告げると、お父さんも、驚いた顔をしました。そして、彼女は、自分の家に帰ったとき、二つの人形を同じ箱の中に入れて、大事に飾ることにいたしました。このときから、長い間不しあわせであった人形は、もう一つのしあわせ人形と同じように、しあわせになつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「赤い鳥」

1923（大正12）年1月

※表題は底本では、「氣《き》まぐれの人形師《にんぎょうし》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

気まぐれの人形師

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>